

# エトガー・ヴォルフム著 (飯田収治・木村明夫・村上 亮訳)

## 『ベルリンの壁 — ドイツ分断の歴史』

洛北出版 2012年12月刊 283頁 2,400円

九 鬼 由 紀

本書は、2009年にドイツで刊行された *Die Mauer. Geschichte einer Teilung* の日本語訳版である。

「ベルリンの壁」は1989年に倒壊した。原著の本国ドイツでの刊行年は、ちょうど倒壊から20周年にあたる。その長い年月を経る中で壁の記憶は薄れ、その歴史を正しく知る人は少なくなっている。「訳者あとがき」によると、ドイツの学生へのアンケートで壁の建設年を正しく答えられた者は50%に満たなかったという。「ベルリンの壁」というものが存在した事実は知っていても、建てたのは誰で、何が目的で、なぜ倒壊したのか、詳しいことが分からない。その状況は日本でも同じことだろう。

本書はそんな、もはや遠い過去の出来事となってしまった「ベルリンの壁」の建設以前から倒壊後までの約30年の歴史とその機能、意味、壁を取り巻いた環境などを、多角的な視点で通観した作品である。本書は「序文」と「むすび」と12の章で成り立っている。以下にその内容を紹介していきたい。

1章「衝撃 壁建設、一九六一年八月一三日」では、壁の初期段階である有刺鉄線が一夜の内にベルリンを分断し、それが監視塔などを持つ大がかりな装置へと変貌する過程でのベルリン市民のパニックが中心に描かれる。壁の突然の出現によって多くの市民が家族や友人と引き裂かれ、逃亡を試みた人々が転落や人民兵からの狙撃によって命を落とした事実が、淡々と述べられている。

2章「前史 壁建設への道」は、壁建設計画の立案から実行までのドイツ社会主義統一党 (SED) の一連の動きを記す。計画は、ソ連の「新路線」の中で孤立した東ドイツでの民衆蜂起 (1953年) をきっかけに芽生え、SED 書記長ヴァルター・ウルブリヒトによって綿密に練られ、ソ連がウルブリヒトからの再三の圧力に屈した結果、実行

に移された。壁は東ドイツが自分で建設したものであり、ソ連は無理やり同意させられたことが強調されている。著者は、最初の有刺鉄線を張る際に援護についたソ連軍を「一九四九年に続く民主共和国の第二の誕生」を助けた「助産婦」だったと述べる。続く3章「安堵 西側と壁建設」では、壁に対する西側諸国の反応が取り上げられる。ドイツが混乱に陥った一方、アメリカやフランス、イギリスはむしろ安堵していた。冷戦下で厄介事だったベルリンの問題が壁建設によって消えたと思われたからである。1961年10月のチェックポイント・チャーリー（ベルリン境界の検問所）での米ソ軍の対峙は、戦争寸前の緊迫した出来事だったが、これによってアメリカは、ベルリンの問題に関する交渉相手が東ドイツではなくソ連であることを認識した。西側諸国にとってベルリンは「冷戦の前線都市」であり、東側と一番近くで向き合える場所ではなかったことが分かる。

4章と5章では、壁の内に残る者と、外へ逃げる者それぞれの歴史が語られる。4章「壁による閉じ込め 『沈静化要因』としての壁」では、国民が壁の存在を受け入れ、社会主義なりの幸福に適応した中で、国家として前進する東ドイツの内政を、5章「人狩り 逃亡の成功と失敗」は反対に、壁を越えようとした人々を待ち受けたものを描く。特に5章では、逃亡者に対する国家人民軍や東ドイツ政府、そして西側の人々それぞれの行動が記されており、彼らの行動は、壁の周辺で人命と自由の価値が希薄になっていたことを感じさせる。

6章「うそ 『反ファシズム防壁』」では、壁を「反ファシズム防壁」として正当化するために東ドイツ政府が行った政策が題材となる。政府は、壁を「平和の包囲線」と称することで、国民に壁の存在意義を受け入れさせようとした。壁建設を記念する国家行事の開催や、壁が西側からの外敵の流入を防ぎ、東ドイツの人々を守るための措置であるとメディアで喧伝するなど、あからさまな「うそ」の手口が明らかにされる。

時代が下るとともに、壁に向けられる視線が変化していったことが、7～9章から分かる。7章「立派な外観 壁緊張緩和時代の壁」は、キューバ危機後の東西ドイツの緊張緩和時代における壁の性質の変化を描く。双方で「目的のための手段」として利用され、観光名所になった壁を挟んで、東西それぞれがドイツの置かれている分断の状況を克服しようとしていた様子が記される。8章「終わりのはじめ 東ブロックの不穏な情勢、新冷戦」では、東側諸国の反社会主義的運動の活発化を経験した後一層深まった米ソ間の冷え込みとは離れて東西ドイツが歩み寄りを見せ、1986年の独・独友好都市協定や独・独文化交流協定締結にこぎつけるまでの経緯が描かれる。そして9章「世界最長のキャンパス ポップ・アートの壁」は、西側の人々が壁の存在に慣

れきった1970年代から80年代にかけて展開した「壁芸術」に光を当てる。「壁芸術」については、制作者の出自も描かれる作風も様々だったが、そこには壁の開放、突破などを暗示させる特定のモチーフが繰り返し描かれたことが述べられる。ある種のポップカルチャーであるこの「壁芸術」を、分断の一側面として歴史の中に位置づけたことは意義深い。

10章「自陣営内の敵 ドイツ社会主義統一党とミハイル・ゴルバチョフ」では、ソ連共産党書記長ミハイル・ゴルバチョフの改<sup>ベレストロイカ</sup>革に西側諸国や東ドイツ国民が共感した中で、古い思想にこだわるドイツ社会主義統一党が彼に反発する様子を映し出す。ゴルバチョフの改革は元々ソ連の立て直しを目的として始まったことだったが、結果的には東側全体に大きく影響を及ぼしたのである。11章「世界を揺るがした出来事一九八九年、壁の倒壊」では、遂に訪れた「ベルリンの壁」倒壊の瞬間が描かれる。壁「開放」当日のSED 政治局員ギュンター・シャボウスキの記者会見の速記録の内容が載せられており、そこからは、壁は誰かが意図的に「倒した」というよりは、自分から「倒れた」かたちになったことが分かる。

壁の突然の倒壊は世界を驚愕させ、東ドイツの人々は歓喜に沸いた。その喜びから醒めた後に残された課題が、12章「壁の消滅と記憶へ 壁が後に残したもの」で挙げられる。壁の破片とともに残ったのは、元西ドイツ市民と元東ドイツ市民の間の格差という「見えない壁」、「壁狙撃兵裁判」に始まる政府犯罪の司法的清算など、短期には解決できない問題だった。ドイツ分断時代の歴史認識についても著者は言及しており、東ドイツの生徒たちの間で広がる東側のイメージは「貧しく、小さな、どこか風変わりで、おかしい国」であり、その中で起こった悲しい現実にはほとんど触れられないと述べる。本稿の冒頭で述べた若者の間での壁の知識の欠如にも、このような歪んだイメージが影響しているのかもしれない。

本書の「むすび」は、現在も世界各地に壁が建設されている事例を挙げ、「ベルリンの壁」倒壊時に人々が信じた自由な時代の到来が結局は訪れていないことの指摘で締め括られる。著者の壁に向ける視線、そして近年における壁が存在した時代の歴史認識への憂慮を背景にした構成は、壁が過去に終わったものではなく、現在まで続く問題の出発点として捉えられなければならないことを我々に感じさせる。また、全体を貫く平易な訳文の語り口は、読者を簡単に「ベルリンの壁」の歴史の中に引き込んでくれる。壁倒壊前後に生まれた世代がその歴史を知るうえで、また東西冷戦やドイツ現代史研究の入門書として、本書は最適な一冊となるだろう。